



金銀の輝き

海を渡ってきた
贈り物



海を渡ってきた贈り物

— 金銀の輝き

Gifts from Abroad

— The Shine of Gold and Silver

平成8年1月6日(土)～3月10日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館



目次

あいさつ	3
Foreword	4
海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き	5
図版	9
出品目録	30
List of Exhibits	31

凡例

- 一、本図録は、平成8年1月6日(土)から3月10日(日)までを会期とする展覧会「海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き」の解説図録である。
- 一、図録の図版及び解説番号は、展示番号と一致する。
- 一、作品解説に記載する法量の単位はcmである。Hは高さ、Lは長さ、Dは直径の略号である。
- 一、作品リストの製作時代に記入のないものは、全て20世紀である。
- 一、写真の一部は、松野正雄(宮内庁囑託、コニカ(株))の撮影による。

あいさつ

明治時代の幕開けから、皇室は諸外国との交流に主要な役割を果たしてきました。とりわけ、平和条約が結ばれた昭和 27 年（1952）以降は国際親善の交流がめざましく、これにともなって世界の国々から多種多彩な贈り物がもたらされました。

今回は、戦後に国外から寄贈されたなかから質量ともに充実している金工品を選び、展観することにしました。古代より、金銀の貴金属は永遠の輝きを誇るものとして諸民族の間で貴重視されてきました。それがしばしば贈り物として選ばれた理由でしょう。

これらは、そのほとんどが、吉祥の模様を過剰なまでに装飾をし、そこに様々な細工の技を凝らすなど、絢爛豪華で宮廷工芸と称するにふさわしいものです。しかし、その一方で、20 世紀の美術動向を反映して、できるだけ装飾を省いた機能重視のデザインによるものも見られます。

金属に備わる様々な特性を生かして、鋳金・鍛金・彫金・象嵌といった造形と装飾の技法がありますが、それぞれの国の職人や工房の手によって、多くはその国に産出する素材を用いつつ、伝統的な製法やデザインを生かしてつくられた作品は、それぞれの文化風土を反映したものといえましょう。

本展では、こうした様々な地域や国の独特の造形である飲食器・置物・刀剣・各種の器・飾り皿など 35 件を出品しています。親愛の気持ちを込めて皇室に贈られた数々の金属細工の造形美と、異国情緒をお楽しみ下さい。

平成 8 年 1 月

宮内庁三の丸尚蔵館

Foreword

From the beginning of the Meiji Era, the Royal Family has played an important role in relations with foreign countries. International friendly relations have been remarkable since 1952 when the peace treaty was concluded, and brought a variety of gifts from countries around the world.

In this exhibition, we will select and display the metalwork pieces which are substantial in both quality and quantity. Precious metals such as gold and silver have been valued by various nations for their eternal shine, which is probably why they were chosen for gifts.

Most of them are fit to be called Court Craft, excessively decorated with auspicious designs which are applied using various techniques. However, reflecting the trend of the 20th century, there are also pieces made with emphasis on function excluding decorations as much as possible.

Various metalwork techniques are used such as casting, forging, carving and inlay, utilizing the characteristics of metal. Each piece is made by artisans and workshops of each country with traditional techniques and designs, mostly using material also produced in that country, and reflects their culture and climate. In this exhibition, we will exhibit 35 sets of dining vessels, ornaments, swords, various vessels and decorative dishes which are each unique forms of various regions and countries. We hope you will enjoy the beautiful forms and exoticism of the numbers of metalwork which were affectionately presented to the Royal Family.

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第10回 海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
1	銀製「リング」		一個		p. 17
2	金製「菊」		一個		p. 17
3	銀製茶器		一組		p. 18
4	銀製飾盆		一枚		p. 20
5	銀製高杯		一個	17世紀	p. 19
6	銀製茶器		一組		p. 20
7	鍍金燭台		一組		p. 21
8	銀製シュガーボウル		一個	18世紀	p. 21
9	銀製小箱		一個		p. 20
10	銀製飾盆		一枚		p. 21
11	鍍金「魚」(自在式)		一組		p. 17
12	金銀製果実盛鉢		一個		p. 9
13	金銀透彫装刀		一口		p. 22
14	銀製シロップ飲用カップ		一对	19世紀	p. 10
15	銀装刀		一口		p. 22
16	銀製水差・カップ		一組		p. 24
17	金装刀		一口		p. 22
18	銀製花瓶、煙草箱		一組		p. 11
19	金装短刀		一口		p. 23
20	金装刀		一口		p. 23
21	金装刀		一口		p. 12
22	銀製飲器		一組		p. 25
23	銀製茶器		一組		p. 25
24	銀製茶器		一組		p. 13
25	銀製象置物		一個		p. 14
26	銀製壁掛		一枚		p. 26
27	鍍金獅子置物		一对		p. 26
28	銀製香水入		一個		p. 15
29	銀製茶器		一組		p. 27

30	金銀製煙草箱		一個		p. 16
31	銀製蓋物容器		一個		p. 28
32	銀製寶石箱		一個		p. 27
33	銀製煙草箱		一個		p. 27
34	金裝短刀		一口		p. 28
35	銀製茶器		一組		p. 29

海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き

われわれの間では人を訪れる者は何も持って行かないのがふつうである。日本では訪問の時、たいていいつも何か携えて行かなければならない。

これは、16世紀後半の30余年間を日本に滞在したポルトガル人宣教師ルイス・フロイスの『日本覚書』の一節である。本書は、ヨーロッパと日本の文化比較をした最初の史料であり、同書には、「われわれの間では種々の物を贈るのは親愛のしるしである。日本では、(贈り物が) 少なければそれだけ礼儀正しい」とも言っている。国や民族が異なれば贈答行為の意味あいもそれぞれに違うわけで、日本では初対面の場合、贈物が欠かせない。それに比べてヨーロッパでは親密の程度に応じて、ということであろう。諸外国から皇室にもたらされた贈り物には、みるからに高価で重々しいのが当然と思われるのだが、贈り主の肌のぬくもりを感じさせる自愛品や記念品である場合も少なくない。

本稿は、前段では明治前期の皇室と外国賓客との交流における贈答の実情について、後段は、出陳品を生み出した国々の歴史的、文化的背景と造形上の特徴や装飾文様の意味などをうかがうものである。

英語の gift は、独語の das Gift (毒) に由来するという。場合によって命にかかわるといふ、考えようによっては厄介な代物であって、贈り手は相手の持ち物や好みに関して細かな配慮が要求される。

江戸時代後期、日本との国交、通商をめざし各国がしのぎを削っていた中で、日本国の歡心を得るために贈る適当な品目を、英国ジャワ総督スタンフォード・ラッセルズはメモ(1814年2月)に書き上げてあった。この企図は、長崎オランダ商館長の反対にあって実行されなかったが、英国人の見るところ、日本人の好みをどう把握していたのかうかがい知られる。その第1には、毛織物、それも色は草色の毛布、フランネル。第2は、金物類、ロンドン製良質の刃物・ガラス(「日本人が熱狂的に好む」と)カットグラス・ラスターグラス・色つきグラス・瓶類・板ガラス・飾りつき香水瓶を挙げ、第3にカーペット・プリント木綿(更紗)・第4、錠前・鉛の塊・板。第5に、イギリス製陶磁、朝食ディナー用セットはウースター、コルブルックの製品を指定。さらに天文用器械・光学器材・明るい色のモロッコ革、ロンドン製マーク付時計、アクセサリー、レース、金銀細工、紙類、水彩絵具、画帖、最上の鉛筆、薬品類、油絵具、栓用コルク各サイズと百貨店なみの品揃えである。さらに要人向けとして、美しい銅版画入り博物誌はじめ、犬ではブルドック、ニューハウンドランド、グレイハウンド、テリア、ポインターを挙げ、英

国特産品や当時新発明の器械、製品、文房具から図鑑類まで、31種類を列記している。ちなみに、この約50年後、安政5年(1858)、日英通商条約のため来日したエルギン卿の使節団は、通商上の交易品として第一に毛織物を挙げている。同時期に滞日したC・モンブランも、羊毛、木綿布地、ゴロ(ゴロフクレン毛織物)、サテン、ビロード、糸、針、なめし皮、鏡、ガラスを「フランス側から提供すべきもの」といい、外国一般貿易には、化学薬品、精密機械、武器、染料など近代科学技術品等を通商上需要が増大すると予測している。

こうした幕末の状況から、舞台は明治新政府にとって代わる。

『明治天皇紀』は、明治天皇の事蹟を中心に、その背景をなす政治、社会、重要事件を編年体で記した史書である。この索引によって諸外国からの受贈品をみると、アメリカ合衆国の兵器、軍用品、蓄音器、速射砲、熊皮、写真。イギリスの御料馬車、馬匹、皇室御肖像画。イタリアの大理石製像、皇帝皇后御写真、ダンテ神曲註解。オーストリアの白石彫刻皇帝像、硝子花瓶、シャムの象、馬、銀製盛花器。ベルギーの銀器、貨幣。スペイン国の年代記。チリーの独立百年祭記念金牌。ドイツの戦争の図、マイセン製陶器花瓶、日米露三国艦艇表、馬。トルコのアラビア産馬。フランスの万国博覧会記念花瓶、馬。ロシアの艦船模型、皇室画像、メーウ製花瓶、緑青花花瓶、宮殿写真、銀製花生などである。索引から引いた資料であるから、省略された部分と、その時代性を考慮しなければならないが、およその想像がつくであろう。

ところで、外国賓客の応接には、明治新体制が発足以来、明治6年(1873)5月5日に炎上するまで、江戸城西の丸宮殿において、外国皇族、大公使との引見には御学問所か小御所を使用し、大・公使の新年参賀には大広間や小御所が使われ、同年から各省雇外国人の朝拝には大広間が使用されている。そして、各種の饗宴は浜離宮内の延遠館で行われた。この延遠館は、慶応2年に徳川幕府の海軍伝習所として建てかけたままになっていた石室を、突然英国ウィンブルグ王子が立ち寄るといふ報を受け、大急ぎで「西洋の制ヲ模」した営繕を行い、明治2年5月に竣工した。この間、外国人接遇のために過剰な優遇を与えるとして反対する攘夷派の運動にあつて混乱も生じた。同館は明治12年のグラント前米大統領訪日を前に、コンドルに大修繕設計と、室内装飾を委嘱したことで知られる。その後、明治16年の鹿鳴館、芝離宮西洋館が明治24年竣工と、外国人接待所ができ、次第に役割を交替していったが、明治22年大破に及び、同25年に取壊された。

明治6年の西の丸宮殿炎上により、赤坂離宮を仮宮殿に定

め、御学問所代や小御代を西の丸宮殿と同じように用いることになり、炎上後の同年9月22日以降、各国に倣って各国公使と御陪食になる慣例もできあがってゆく。

延遼館建築のきっかけになった英国王子に対して、宸筆の御製を英女王に献じるために託し、蒔絵見台、蒔絵十種香箱、蒔絵手箏笛、古銅物各々1個と金魚鉢2個、盆栽27鉢、金装短刀1口、画帳を贈り、水師提督以下随員に大刀各々1口を賜ったことが記録されている。

翌年9月12日、オーストリア・ハンガリー国全權使節アントニーペッツが修交通商航海条約を締結するため、朝見の上、国書を拝呈したときの様子、式次第を紹介しよう。まず、午の半刻過ぎ、大広間に出御され、右大臣三条実美、外務卿沢宣嘉侍立するところへ使節が随員ら7人を従えて参進、使節来朝の旨趣を言上し、国書を捧げる。天皇立御してこれを受け、叡覧の後、玉座の側に置き、勅答書を読み、これを右大臣に付される。右大臣はこれを大訳官に訳させて使節に伝える。次に勅語を賜い、使節来朝の労を慰し賜う。使節退下、天皇入御。次に御上間に於て使節に茶菓を賜う。延遼館で酒饌を賜う。使節への接遇は以上のものであって、この日、同国皇帝から天皇に、白石彫刻皇帝像、皇帝写真、写真山水諸画宝匣入1箱、オーストリアの遊獵画本1匣、ハンガリー鞍諸具付2具、ボヘミアの遊獵画本1匣、ボヘミア硝子花瓶2個、帝室紋章付眼鏡1個、オーストリア金銀貨幣数品1匣、皇后にはオーストリア琴1面、写真眼鏡画36葉入1匣、澳地利名産砂糖菓子1匣等が贈られた。これに対し、天皇から同皇帝、皇后に漆器、古銅器、大刀、織物、本邦産草木風俗図巻を賜わらせられ、使節随員にも各々物を賜っている。このようにみてゆくと、明治のごく初期に來日した国賓などの贈り物は、冒頭のルイス・フロイスの言とは正反対に、ヴァラエティに富んだものであった。そして、我が国から答礼に用いた物も多種にわたるけれども、およそ漆器、織物、大刀、古銅物、そして後には七宝、陶磁器も加わって、その中から選択され、次第に、肖像写真、勲章などが主流を占めるようになり、品目が絞られていったのである。幕末に滞日して見聞記を記したC・モンブランは、日本人の細かい配慮と知性を仕事に発揮した職人技をみるに及び、たとえば「漆器は実に見事で、この種のものの中では何ものにも勝っている」と絶賛し、青銅彫刻、絹、陶磁、刀、七宝にも、それぞれその芸術性の高さに賛辞を送っている。おそらく、こうした外国人の日本美術に好意的な言説をもとに、贈り物を選択し、絞り込んだことであろう。

更には明治新体制に変わり、旧藩に庇護されていた工芸職人たちの苦境脱却の方法としてはもとより、新国家は殖産興

業を急務として、万国博覧会に参加する。明治6年のウィーン万国博覧会に参加する目的は、優秀で精巧な製品を外国に知らせる、輸出の振興増進の基礎をなす、外国の有名物産の性質や価格を調べ海外が何を日本に求めているか探索することにあったから、この頃には、贈答に好適な品目の見当もついたにちがいない。

明治5年10月來日したロシア国皇子から贈られた品の保存についての検討をきっかけに、「外国交際上相互に贈答することは国光の一端ともなり、その品が数百年を経ても損逸しないよう注意することが交際上、至要の儀である」と外務省から太政大臣に上申した結果、明治6年8月4日づけの聖旨を持って、座右に留められた品と酒菓の類を除いて、総て延遼館に収蔵してこれらを保存することになった。

その後、この館は、フィラデルフィア博覧会への出陳物を天覧に供し、明治10年2月1日外務省が全焼した折には、一時仮移転先に充てられてもいる。さらに、翌11年の正月には、ここを会場に各国公使を招いて新年の宴を賜り、この後恒例として実施された。

焼失以後、紆余曲折を経、ようやく明治21年、皇居明治宮殿の完成を見て、公式行事の舞台が整ったのである。これより先、明治15年8月10日各国公使艦隊長等の内謁見及び各国侍臣の国書奉呈式などの公謁見に上請の手續を改正している。また、ヨーロッパの伝統的な宮廷社会の儀式や社交上の仕来りなどの指導を仰ぐために招いたドイツ貴族オットマール・フォン・モールは明治20年3月から滞日、明治22年3月にその目的を満たして帰国していった。

さらに、明治24年3月2日づけ、国内外の献品取扱内規を改正して、外国人の進献は外事課を経ることに定められた。また、各種新製作の物品及び著訳の図書、絵画、それに新に発掘採種した天造、人工の物品の中で勸業に資するもので進献を請うものがあれば詮議の上その希望に応じること、さらに古書画、古器物、刀剣、砲銃の類を宝庫又は御手許に保存の目的をもって進献しようという者があれば、鑑定人に基の品位を鑑定させて受否を決することを定めている。他に報酬を求める者に対する対応や金銀、貨幣、土地、家屋は一切受納しないなど事細かに定め、以後、進献、買上げの折節には、この内規によって照らし合わせ、対応することになったのである。

以上のように、明治20年代前半までには、外国賓客等の接遇環境が整備されたことがうかがえる。

当館に所蔵する海を渡ってきた贈り物は、戦後の、平和条約が発効した昭和27年(1952)以降、皇室の国際親善の場

もたらされた品々である。

展示目録は、大陸毎に分け、アメリカからヨーロッパ・アフリカ・アジアへと、東回りに巡るように配列した。

南北アメリカ大陸の諸国は、金・銀・銅といった鉱物資源に恵まれており、世界で有数の輸出量を誇っている。

アメリカ合衆国の場合、初期にはイギリスやヨーロッパ各地から製品の輸入に依存しており、植民地時代、各地の職人が作る金銀器はほとんどイギリス・オランダ製品を模しており、次第に手本に匹敵するものも作られるようになる。19世紀中頃に彼ら職人が会社にやとわれて大量生産が行われた。

宝飾の店で知られるティファニー社は、1867年のパリ万博に銀のピッチャー、コーヒー、ティーセットを出品して一等賞を受賞しているからもとは銀器商として出発したのである。(1)のリングは、同寸大に実物があるがままに鋳造した生産工芸品である。胴部の線が上下に分かれて蓋物容器かと思われるが動くわけではない。ヨーロッパ諸民族の伝説に多く登場するリングは、聖書の禁断の実以来、ギリシア神話に三女神が金のリングを中に美を競う話など数々あり、さまざまなイメージで受けとめられる。(2)の菊は、大輪の花をつけた菊枝を切りとってきて、それをあたたか金泥に浸して固めたような写実性に富む。同国では、菊の花は特別な意味を持つものではない。本品は恐らく日本の皇室に贈ることを意識した特注品であろう。

(3)の奇妙な器物は、アメリカ大陸原住民のインディオが薬用に使っていたマテ茶(ブラジル南部からアルゼンチン北東部山地原産モチノキ科の常緑樹。葉を熱気で乾燥し、砕いて使う)を飲む道具であり、茶を入れ、湯を注ぎ、ストローでかき混ぜ、それで吸う。湯を注ぎ足し回し飲みする。ストロー先端の怪鳥の表情をはじめ、茶器を支える半身上下に異なる怪獣・把手にへばりつく野獣、器物に浮き彫りされた海蛇(?)の組合せ連続文等は、圧倒的霊力を与えられるにふさわしい王者のみに許された民俗的な意匠と思われる。

ヨーロッパでは、17世紀にアメリカ大陸から大量の銀が移入されて、銀製品生産が増大し、宗教用の大燭台、香炉、杯をはじめ生活用品の皿鉢、紅茶、コーヒー、チョコレート用の茶器が18世紀以降に盛行した。とくに19世紀末にあらわれたアール・ヌーヴォーの銀製品は注目に値する。それは機械導入によって次第に芸術的水準が低下していったが、その中で、今日、北方のスカンディナヴィア四国は、工芸デザインの宝庫とされ、この方面のデザイナーで現在最も活躍し

ている作家を独占している。とくにフィンランドは、ジョージ・ジェンセンとヘニング・コッペルが指導を行い、デザイン教育も研修の機関も完備している。(5)は、本品に対して、ニュールンベルグ出身のフランツ・ドッテ(1592～1612年に活躍)の作という伝来がある。打出しによって形成され、鐘形の蓋の頭部に親指大の水晶を嵌めてある。このような形状のものは本来職人の昇格試験の課題作となるほか、祝の席上、装飾の大杯として用いる。ドイツ皇帝などが都市を訪問すると歓迎の祝杯を勧められ、そのまま杯を贈物として手交されることもあったという。

銀製茶器(6)、燭台(7)は、18世紀に盛行した銀製品、陶磁器の量産という時代の次には全体で低調となり、ただ過去の様式を模倣しようとする時代の産物である可能性が強い。ベルギーが1830年建国以後、ゴシック、ルネサンス、フランドル様式などの模倣とそれらの折衷融合をしたその産物とみなしてよい。茶器は、鍛金、彫金により、古典的なアカンサスの葉やバラの蕾らしき文様を浮彫としてそれに象牙の把手をつけ富裕な階層の家庭用にふさわしい装飾である。

イギリスの、小箱(9)は良質の銀を、緻密に透彫りすることで5弁の小花・唐草の連続文を、洗練した細工技術で表現している。この手の箱は記念品としてまとまった数を発注することがある。同様に、飾盆(10)は、今世紀中頃以後、英金銀細工界で知られたジュラルド・ベニーが、動物学協会の発注により制作した鳥尽しの模様の皿である。(11)の魚は、タラもしくはメルルーサのようなスペインでなじみ深い品種に似ているようであるが、特に特定すべき手がかりもない。金属片を巧みに継いで、実際の魚と同じく自在に動く。

アフリカの広大な土地に生きる諸民族の生命感あふれる美術の数々、文字通りここから産出した金に由来する黄金海岸のアシャンティ王国の18～19世紀の金製宝飾はよく知られている。だが今回展示の3国は、地中海沿岸沿いや、大陸の北側に属しておりイスラム美術圏の範囲に含まれる。(12)は、細線細工の極致をみせる。時には直径がミリメートル以下にした銀の針金を巻き、ねじり、装飾モチーフを形成してゆく。必要によってハンマーでたたいて平らにする技法であり、さらにそれを薄板の上に残すことによって補強、支持体にする場合などがある。この起源はメソポタミアにあり、フェニキア、ギリシアからヨーロッパ諸国に入り、ビザンチン時代の宝石細工と相まって復活、アラブ人の間でもはやされ、スペインへ伝わり、ヨーロッパではルネサンス期に再開花した。地中海沿岸諸国で行われ、一方東南アジアでも繊細な技法がみられる。(18)(28)

アジア大陸は広大である。宗教もイスラム教、仏教、ヒンズー教が交錯する。イスラム美術は、教義が偶像崇拝を禁じ、公的な美術では人間や動物の造形表現まで禁制された。その代り、装飾文様の展開、幾何学文、アラベスク、文字文など無限の連続文様を装飾に多用した建築や工芸が高度に発達したのである。

アジアの西、中近東の諸国からは刀剣を贈られている。ローマ帝政期の名剣は東方から輸出されたダマスクス剣の技術が作り出し、ヨーロッパのジューゲン、ゾーリンゲンに定着して、両刃の長剣を生み続けた。甲冑の発達に対抗して、エトルリア式鍛造法（軟鋼の中子を硬鋼で包み込む）を改良して、刺突用の細い長剣を生んだが、やがて銃砲の普及が刀剣の出版を失わせる。ルイ 14 世の常備軍は、騎兵用として反りのある片刃のサーベルを斬撃用として制式化した。以後は指揮刀となる。

中近東の鋭利な刀剣の鍛造技術は、ダマスクス以来の伝統であり、この地域の刀剣の特徴として、やや太身の反りのある刃と、柄長のほぼ 4 分の 1、柄頭が刃の向きに直角に近い角度に折り曲げてある点が挙げられる。鐔、柄、鞘には金、銀装としてそれに貴石を嵌めこみ、金線、象嵌、彫金と多様な細工を凝らすことも多い。古来、力、権威を象徴するものであったから、王侯貴族が佩用し、より上位の者に献上する、または臣下に授けるに格好の品であった。

ネパールの美術は、インド美術の伝統を受け継ぎ、仏教、ことに密教とヒンズー教、それに民間信仰が加わって独得の雰囲気醸成している。とりわけカトマンズ盆地のネワールは、インド文明をもとに都市を形成し、独自の文芸を発展させ、建築、彫刻、絵画、金属細工の工芸に見るべきものが多い。

一方、スリランカ美術も、インド美術の伝統を継承しながら、広く東南アジアの美術に強い影響を及ぼしている。仏教美術を中心にヒンズー教のそれを取り入れ独自の展開をした。月石（ムーンストーン）とよばれる、きわめて手の込んだ動植物を浮き彫りに描いた戸口の敷石と、守護石（ガードストーン）という吉兆の像を飾った銘額（龍王など）が建物の入口に立てられてるなど、建築の装飾が知られる。

タイは、古くはインド文明を伝え、11～13 世紀にはカンボジアのクメール美術に影響され、モン族がクメールから独立をして独自の文化を作り上げ、14 世紀にはアユタヤー王国がクメールをも一時支配する強国となった。1767 年ビルマの侵略を受けてアユタヤーが破壊されたあとも、古来の伝統を重んじ独得の優雅な美術を残している。ビルマとの歴史的な対立関係をとおして、スリランカのアートが伝播されたこともつけ加えねばならない。とくに、タイ美術独得のニエロ

という工芸技術は、はじめ 15 世紀に半島ナコーンシタマラートで発達し、のち、アユタヤからバンコクへ伝わったとされる。錫、銅、銀に硫黄を加えて、黒色のアマルガムを作り、細かい粒子にする。器体の上に文様を描いて、擦り落した上にアマルガムを塗って加熱、定着させて磨くと、金銀の地に黒色の文様が表れる。この技法は古く、西アジアやエジプトに起源を求められ、ミケーネの紀元前 16 世紀にみられる。15 世紀イタリア、ドイツ、ボヘミア製品が知られるものの、今は遠くタイで盛行しているのみである。

カンボジアは、12 世紀初め建造の最高傑作の一つアンコールワットを誇る。この装飾の特徴は、ぎっしり目の込んだ植物文様のなかに人物像が盛り込まれまたは神々の教えが浅浮雕で刻まれ、多く叙事的場面や神話のモチーフを表現する。工芸品もまた同様に細工された。

インドネシアの美術は、仏教、ヒンズー教とインド密教とイスラム教の影響を受けて、独特の表情をみせる。とくに物語絵図風の薄肉浮刻が知られ、仏陀の誕生から仏滅まで、またはヒンズー教系の神話や叙事詩を主題とする。植物の装飾、唐草、蓮華文様を多く用いてあり、8、9 世紀に隆盛した青銅器美術の伝統を伝える金銀鍍金の技術、象嵌、それに加工宝飾や打ち出し装身具の金銀細工が優れている。また、クリスという左右非対称の、波形にうねった特有の短剣は、豪華な装飾とあいまって、インドネシア美術を代表するものである。

菅居正史（すがい まさふみ／当館学芸室主任研究官）

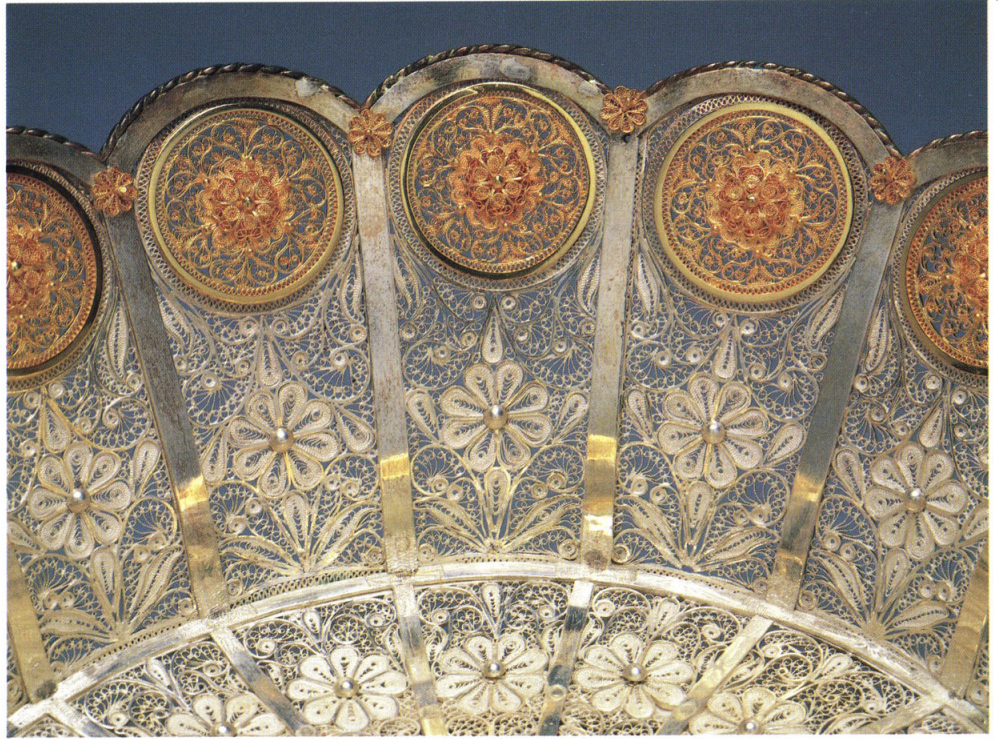
- | | |
|----------|----------------------------------|
| 宮内庁 | 『明治天皇紀』 吉川弘文館 1977 年 |
| 若宮信晴 | 『西洋装飾文様の歴史』 文化出版局 1880 年 |
| 小野木重勝 | 『明治洋風宮廷建築』 相模書房 1983 年 |
| 吉田光邦 | 『文様の博物誌』 同明舎出版 1985 年 |
| 吉田光邦 | 『工芸の社会史』 日本放送出版協会 1987 年 |
| 山口遼 | 『ジュエリーの話』 新潮社 1987 年 |
| 伊東史朗 | 『狛犬』 至文堂 1989 年 |
| | 『世界美術大事典』 小学館 1990 年 |
| ルイス フロイス | 岡田章雄訳 『ヨーロッパ文化と日本文化』 岩波文庫 1991 年 |
| 吉永邦治 | 『世界の文様』 小学館 1992 年 |
| | 『東洋の造形』 理工学社 1993 年 |
| J. ボワスリエ | 『アジア・美の様式』 上・下 連合出版 1994 年 |

12 金銀製果実盛鉢 H.24.5
エチオピア連邦民主共和国

鉢は16個の厚い丈夫な銀枠で蓮弁形に作られている。蓮弁のひとつひとつは金の小花でつながれ、その上部に細かな唐草、小花をびっしり詰めた円文がある。その円を支えるように8弁花の草花立木に唐草、ペーズ

リー文様を銀の細線細工により施す。脚部は草花を逆にした形に表わす。銀線細工はあくまでも緻密であるのに対し、全体には不均衡になっている。

12部分



12



14 銀製シロップ飲用カップ 皿 D.13.7
カップ H.13.0 エジプト・アラブ共和国

わす。刻銘「Sorham E (将棋駒枠に錨)」

カップは格狭間枠の繰り返し、それに沿って青海波文をはわせ、その中央に草花の立木文様を彫金で表す。蓋のつまみと古木枝の把手にたたずむ孔雀。長生の古木と不滅の象徴孔雀のモチーフが東洋的雰囲気を漂

14



14



18 銀製花瓶、煙草箱 花瓶 H.23.5 煙草箱 H.6.0
シリア・アラブ共和国

花瓶と煙草箱の組み合わせによる1組揃である。銀線細工の花瓶は6花弁が各々草花が上へゆくほど横へ広がる。それは繁茂、子孫繁栄につながる。煙草箱は12花と唐草、蓮弁の外周といった蓮花尽しとなっている。

18 部分



21 金装刀

L.101.8 カタル国

細かな文様と装飾宝石の数の多さ、とくに鋸歯文様にルビーとダイヤモンドを交叉させた鍔口寄りの装飾は圧巻である。

21



21 部分



24 銀製茶器 ポット H.22.5 砂糖入 H.15.0
ミルク入 H.15.0 トレー D.47.8
スリ・ランカ民主社会主義共和国

ルビーをふんだんに用いた洋風紅茶セットは、胴まわりに花喰鳥と唐草、孔雀の連続模様。枝をくわえて飛ぶ花喰鳥は、それで巣を作り新しい生命を産むことが

ら吉祥の前兆とみられている。紅茶ポットの注口は竜であろうか。

24 部分



25 銀製象置物 H.24.7
スリ・ランカ民主社会主義共和国

インド神話では最高神の一つインドラの乗り物とされる。象の装いは、薄い銀板の上にルビーなど貴石をちりばめて、染織の風合を見事に表出している。



28 銀製香水入 H.18.0
 Bangladesh 人民共和国

銀線細工による。花文様を基本に唐草をつなぎに使い、全体として立木を表わす。花には二重に花弁を重ねたのもあり、それぞれの花芯は真珠かと思わせる丸釘頭に作ってある。



30 金銀製煙草箱

H.11.0 タイ王国

黒漆時絵と酷似するニエロによる金属器である。漆工、金工とともにこの国が得意とする伝統技法である。重厚で端正な形の箱には各辺に沿って幾何学文様を施して縁取りとし、中央部に独特の唐草文を組み合わせる。



1 銀製「リンゴ」 H.11.0 アメリカ合衆国

刻銘「TIFFANY & Co. MAKERS SILVER PLATED 48 U 48 133」

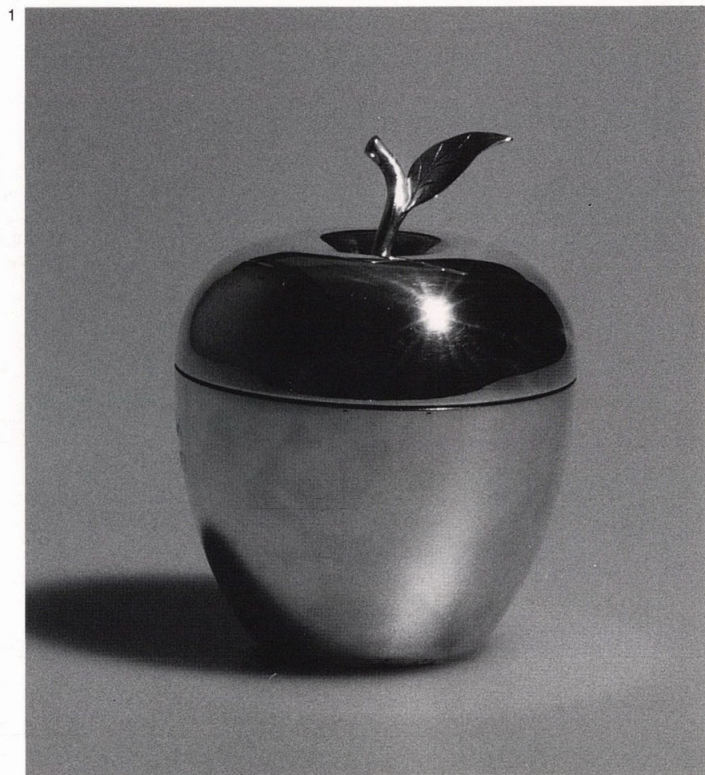
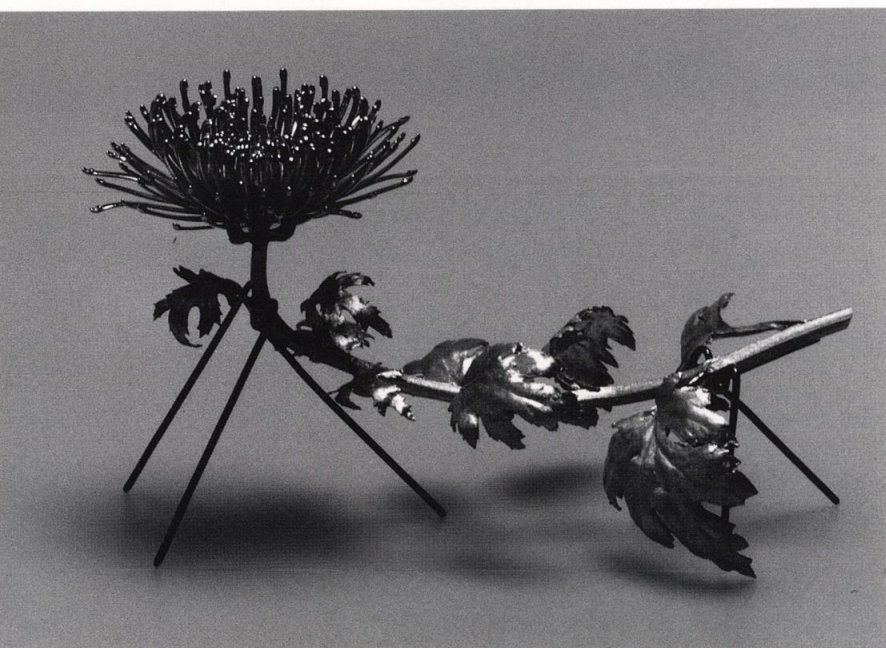
2 金製「菊」 H.12.0 ヴェネズエラ共和国

鉄鉱石の一大産地であり、ギアナ高原からの金の産出も豊かである。鑄造による。

11 鍍金「魚」(自在式) L.20.0 スペイン

自在に動くように作られた魚は、玩具同様に気軽にもち遊びたい。目は大きなエメラルドを嵌める。中世ヨーロッパでは、エメラルドの緑が眼にやさしいために、眼病をやわらげると信じられていたという。

2



11



3 銀製茶器
チリ共和国

茶器 H.15.7 吸口 L.23.9



5 銀製高杯 H.38.5 ドイツ連邦共和国

16～17世紀に活躍した、ニュールンベルグ出身のフランツ・ドッテの作と伝えられる。鍛金による。刻銘「N F」



4 銀製飾盆 H.2.7 D.39.0 フィンランド共和国

厚手の銀板を打ち出して、悠然と飛翔する二羽のカモメを表現する。北欧の簡明なデザインと綿密な鍍金細工の職人技との融合がうかがえる。刻銘「JAT ♡ 830 波上小船 H8 m PP」

6 銀製茶器 ポット H.18.5 砂糖入 H.12.0
ミルク入 H.7.0 トレー L.49.0 オーストリア共和国

刻銘「WIENER SILVERSMIDE L. Tarosinski & S. Vangojn HANDSLAGET HANDDRIVET STERING ♀ 925 2301」

9 銀製小箱 H.10.5 イギリス

刻銘「RGH 925h」

4

9



6



7 鍍金燭台

H.28.5 ベルギー王国

脚の四方に上半身馬、下半身竜尾の怪獣を据える。孔雀石、トルコ石、オニクスを適宜配し、ローソクを立てる皿を支える優美な曲線を構成している。刻銘「MD CCCCL IX CA799/1」

8 銀製シュガーボウル

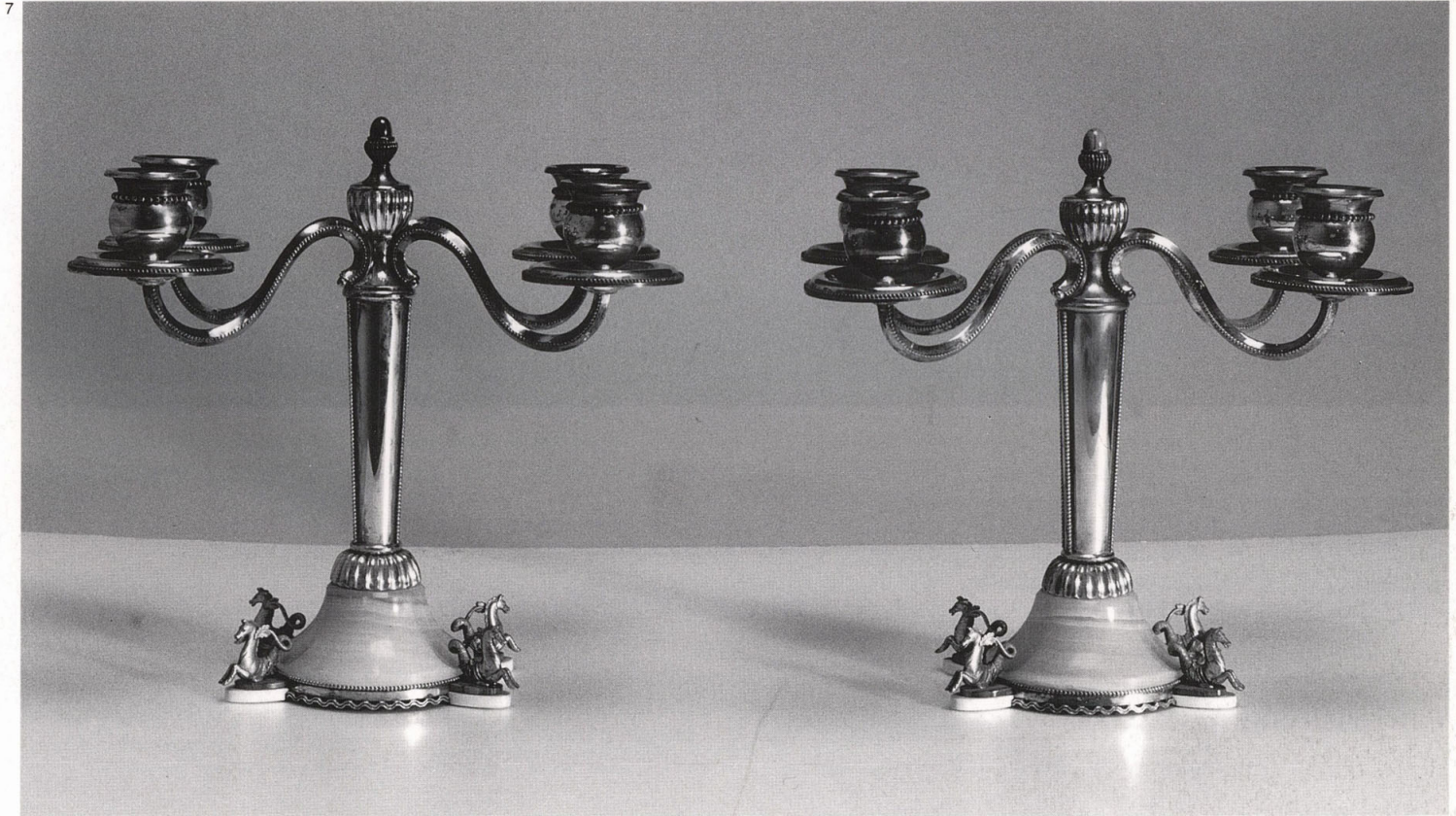
H.13.7 アイルランド

古式の兜を模した器体に、アカンサスの花文様を彫り出した。ナポレオンの遠征に合わせて広がったアンピール様式の萌芽、あるいはその先駆となる時期に生れた。刻銘「(将棋駒の枠に立人像)、(将棋駒枠に)鳥、(楕形枠に)Z」

10 銀製飾盆

D.26.9 イギリス

鷺、鶴、孔雀、ペリカン、鷺など水鳥を主に盆の中央部分に浮き彫りとし、外縁は藁が芦が密集しているような線刻を施す。陽刻銘「AGB(獅子)(ジャガー)q GERALD BENNEY 13WYON TRANDBEER DPL」



13 金銀透彫装刀 L.101.3 モロッコ王国

古代の美術、ギリシア・ローマの遺跡が残る同国は、11世紀にイスラム美術の影響を受けた。堅木の柄に、小指の納まる窪を作り、実戦向きの工夫が凝らされる。鞘には二ヶ所に鍍金を打ち、金色の四弁花連続文がみられる。鞘全体にはハート型の枠に詰めた唐花文を互

い違いに透し彫とし、その間から内側の濃紺のピロードをうかがうことができる。

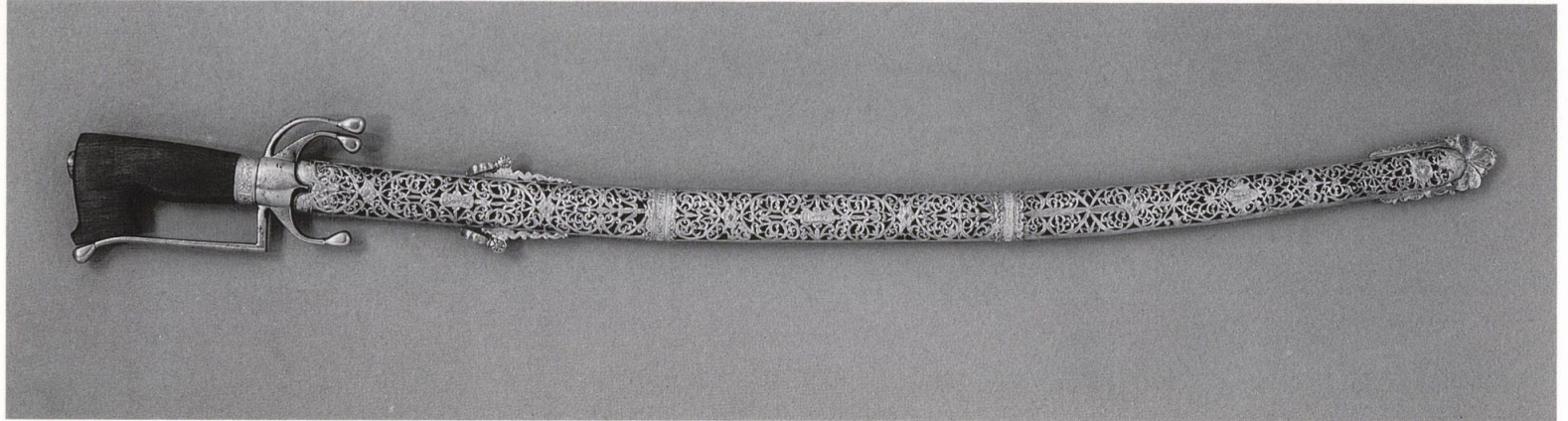
15 銀装刀 L.97.5 ジョルダン・ハシュミット王国

銀装の鞘は、太身で実戦向きの刀を包む。細かい波文を互い違いに向いあわせて、鑑(こじり)まで二列に連

ねた文様構成は実用向の剛直な刀装である。

17 金装刀 L.97.7 サウディ・アラビア王国

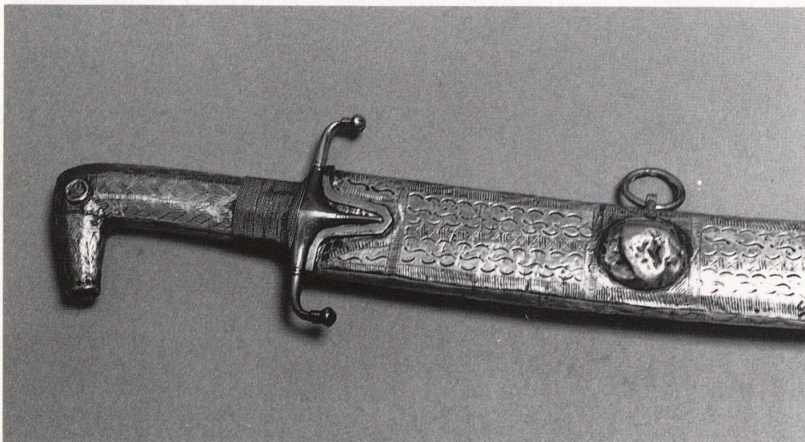
金装の鞘は魚々子に彫って花唐草文様を浮彫りし、前吊金具の鐳側には、トルコ石、ルビーで刀剣の交叉、エメラルドの花文、細かなダイヤで太陽の形を作る。



13



15



15 部分

17 部分



17

19 金装短刀

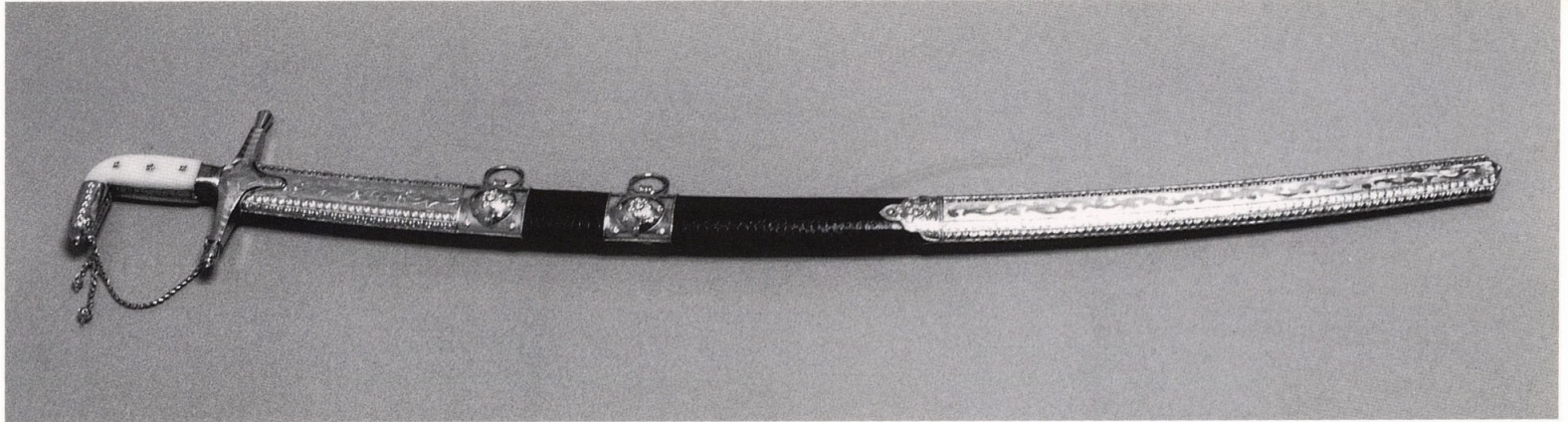
L.27.3 アラブ首長国連邦

刃の中途から急角度に折り曲げた形状の短刀はアラブ世界特有である。彫金による唐草文、連珠文の細工と、小花を中央に置いて、菱文様を幾重にも重ねる曲折上の鞘の装飾は、金線を編み込んでいる。

20 金装刀

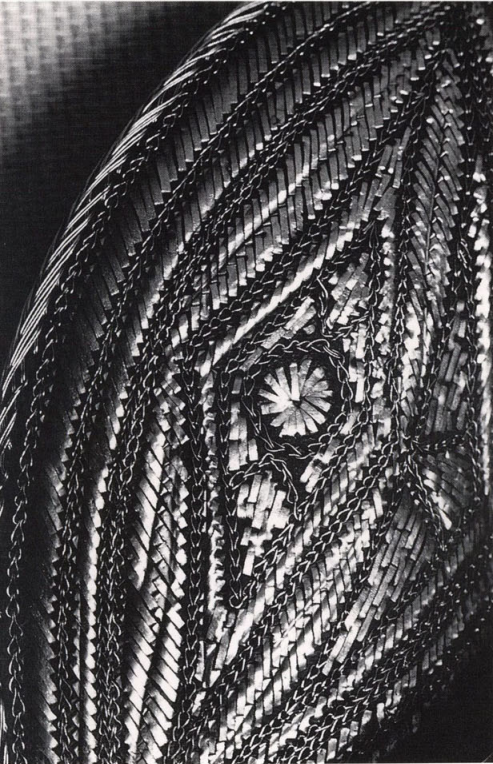
L.102.7 アラブ首長国連邦

鞘の中間部を黒鱈皮包として、鐔口と石突の先端から挟むように金装とする。鞘の装飾では吊金具の取付け部にダイヤを嵌める。



20

19 部分



19



16 銀製水差・カップ 水差 H.34.5 カップ H.8.4
サウディ・アラビア王国

MANL.]

ふくよかな胴まわりに、細かい脚部の水差は薄く軽い
ため不安定である。転倒防止の台枠に果実棚にアカン
サス文様を鑄造する。刻銘「(楕円枠に) 800 (三葉枠に)
AHF (楕円枠に) 071 AL FITAIHI LAVORAZIONEA

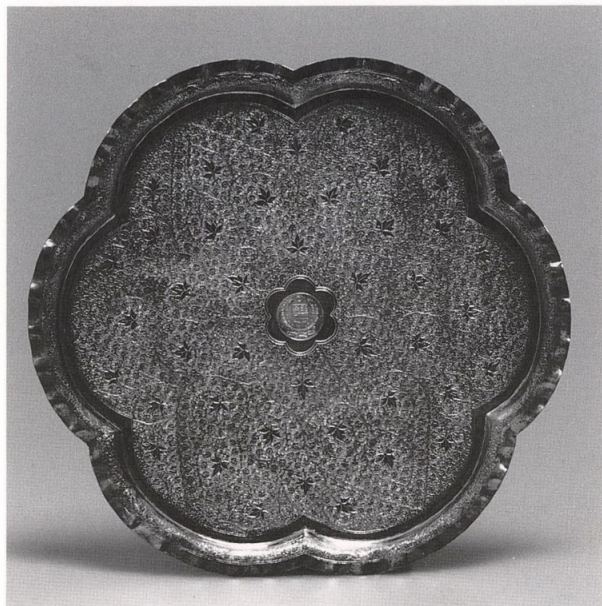
16 部分



22 銀製飲器 水差 H.22.5 カップ H.5.3
トレイ D.25.5 パキスタン・イスラム共和国

モスクを思わせる柔い丸味が特色。微細な唐草文がびっしりと繁茂し、点々と散在する小花を抱き込み、生命の強さを誇示する。カシミール銀器として知られる。

22 部分



23 銀製茶器 ボット H.22.5 砂糖入 H.13.5
ミルク入 H.12.0 パキスタン・イスラム共和国

器体の胴から下に、大きく渦巻状に唐草文を深目に刻む。胴半分余白を残す文様構成が特徴的。

22



23



26 銀製壁掛

D.25.0 ネパール王国

中央にカトマンズー谷の有名な寺院を置いて、その周囲に水がめ、蓮華、雨傘、旗、貝殻、魚、ヤクの尾製はたき、蛇取用網器を配して刻んである。この8種が、多幸と繁栄を象徴する。これらを所持すると健康・福祉・多幸がもたらされると信じられて、寺院、家庭の戸口、壁にこの模様が描かれる。

27 鍍金獅子置物

H.31.0 台 H.6.0 ネパール王国

東南アジア、中国の霊獣には、開口して舌出しの例が少なくない。中国で信仰された兕(じ)について、『説文』は、「野牛の如し、青色、其の皮は堅く厚し、鎧を制する可し」とある。また、仏が説法をするのを獅子吼という。

27 部分



26



29 銀製茶器 紅茶入 H.16.0 砂糖入 H.11.5
ミルク入 H.8.6 ミャンマー連邦

西洋風紅茶器セットに施された過剰な装飾。ティーポット蓋上の獅子、注口の怪獣、把手は女神、胴部をとり巻く耕作図、舟遊び図の浮彫りが、この国の宗教観、風俗を伝えている。

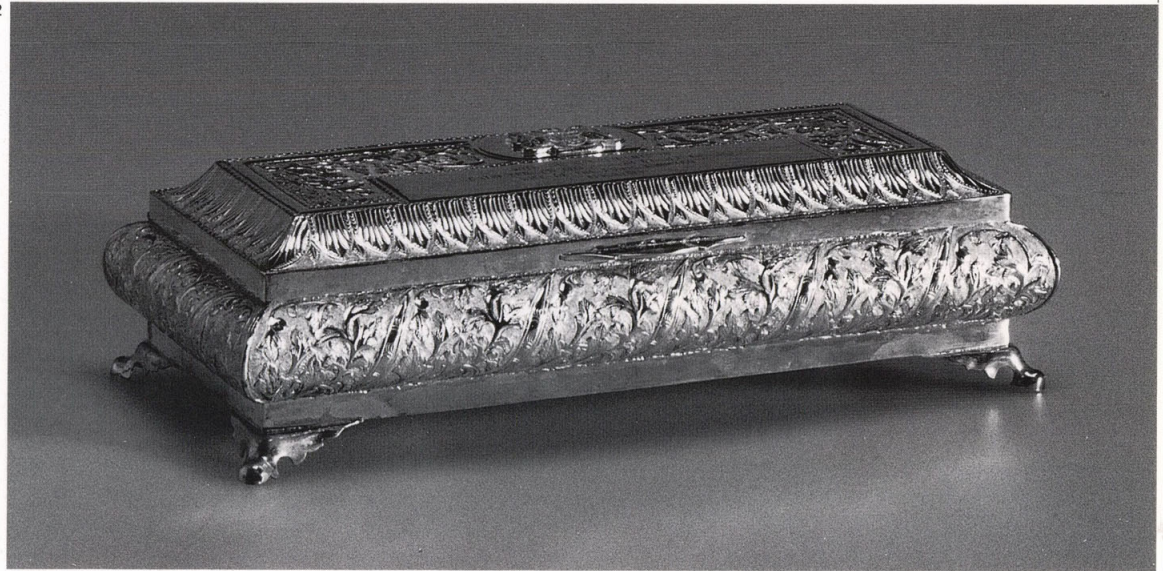
32 銀製宝石箱 H.7.8 マレーシア共和国

刻銘「☆ SHARIKAT TABA ☆ MALAISIA (中央円内に仏座像) TABA STERLING 926」

33 銀製煙草箱 H.6.2 マレーシア共和国

旧マライ連邦を構成していた13ヶ国の紋章を刻み入れてある。巨大な錫鉱山を擁し、錫工芸の技術が多彩である。刻銘「ALL. KIB. K.」

32



33



29



31 銀製蓋物容器 H.28.5 カンボディア王国

クメール（カンボジア）の文様は、唐草、渦巻、蓮蕾、花卉など植物文様がいたるところで使われている。清浄な水を容れる器を支えるキンナラは、「人間であろうか」という意味の単語で、仏教神話では上半身人間、下半身が鳥の、夫婦の音楽神とされる。

31 部分



34 金装短刀 L.69.0 インドネシア共和国

クリスと呼ばれる特異な形の短刀は、インドネシア・マレーシア独特のものである。柄頭には豊富な女神像を成形し、貴石を衣装や髪形、人体表現に用いる。鞘の片面は叙事詩の守護神を陰刻、特徴のある幅広の鍔は象牙と、貴重な材料及び彫刻の技術を凝らしたもの。

31



34



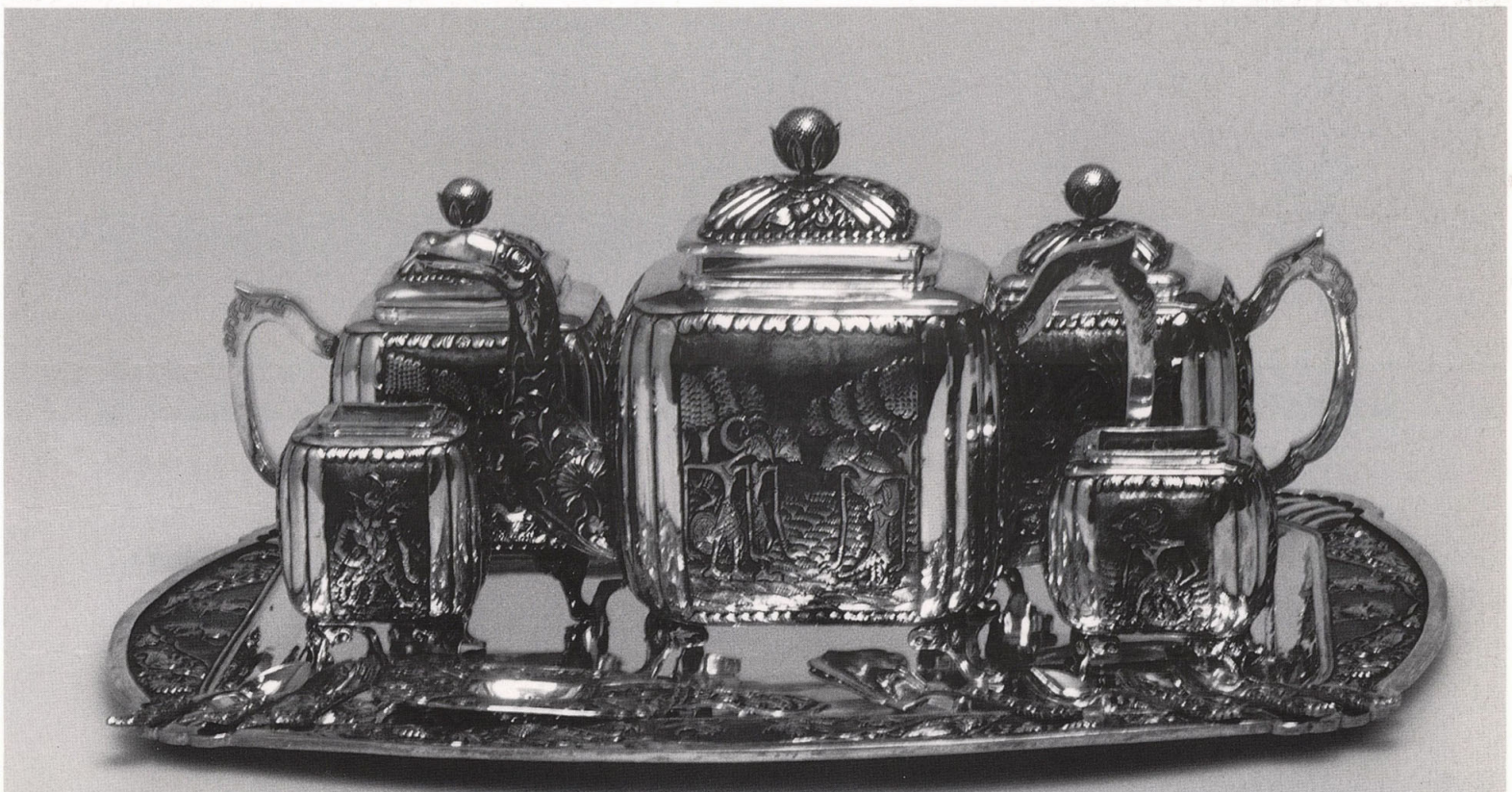
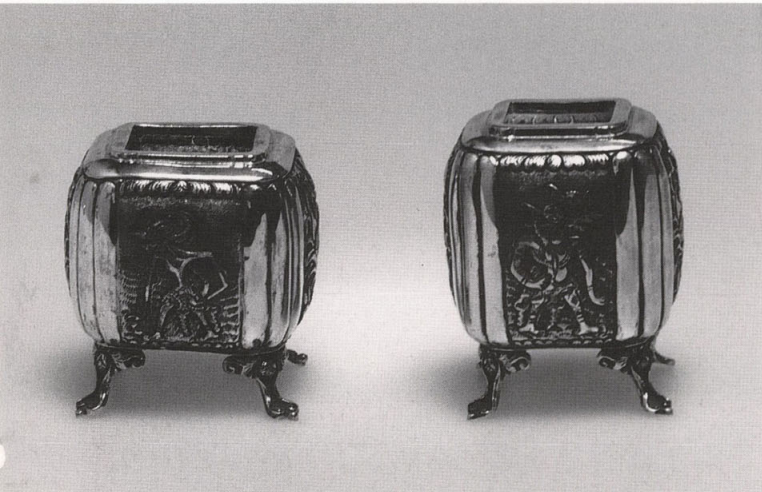
35 銀製茶器 大ポット 19.6 小ポット H.15.6
 トレー D.47.3 インドネシア共和国

トレーいっぱいの紅茶セットには鍛金彫金を駆使して
 叙事詩の各場面を表わす。文様を施した部分は黒色を
 施し、銀に映える。把手は摩竭魚と呼ばれる十二宮の
 魚宮にあたり、海の大食漢とみなされている。

35 部分



35 部分



出品目録

作品名	員数	装飾素材	製作期	寸法	国名
アメリカ					
1 銀製「リング」	1 個			H.11.0	アメリカ合衆国
2 金製「菊」	1 個			H.12.0	ヴェネズエラ共和国
3 銀製茶器	1 組			茶器.H.15.7 吸口 L.23.9	チリ共和国
ヨーロッパ					
4 銀製飾盆	1 枚			H.2.7 D.39.0	フィンランド共和国
5 銀製高杯	1 個	貴石	17 世紀	H.38.5	ドイツ連邦共和国
6 銀製茶器	1 組	象牙		ポット H.18.5 砂糖入 H.12.0 ミルク入 H.7.0 トレー L.49.0	オーストリア共和国
7 鍍金燭台	1 組	貴石		H.28.5	ベルギー王国
8 銀製シュガーボウル	1 個		18 世紀	H.13.7	アイルランド
9 銀製小箱	1 個			H.10.5	イギリス
10 銀製飾盆	1 枚			D.26.9	イギリス
11 鍍金「魚」(自在式)	1 組	貴石		L.20.0	スペイン
アフリカ					
12 金銀製果実盛鉢	1 個			H.24.5	エチオピア連邦民主共和国
13 金銀透彫装刀	1 口	木		L.101.3	モロッコ王国
14 銀製シロップ飲用カップ	1 対		19 世紀	皿 D.13.7 カップ H.13.0	エジプト・アラブ共和国
アジア					
15 銀装刀	1 口			L.97.5	ヨルダン・ハシュミット王国
16 銀製水差・カップ	1 組			水差 H.34.5 カップ H.8.4	サウディ・アラビア王国
17 金装刀	1 口	貴石		L.97.7	サウディ・アラビア王国
18 銀製花瓶、煙草箱	1 組			花瓶 H.23.5 煙草箱 H.6.0	シリア・アラブ共和国
19 金装短刀	1 口			L.27.3	アラブ首長国連邦
20 金装刀	1 口	貴石		L.102.7	アラブ首長国連邦
21 金装刀	1 口	貴石		L.101.8	カタール国
22 銀製飲器	1 組			水差 H.22.5 カップ H.5.3 トレー D.25.5	パキスタン・イスラム共和国
23 銀製茶器	1 組			ポット H.22.5 砂糖入 H.13.5 ミルク入 H.12.0	パキスタン・イスラム共和国
24 銀製茶器	1 組			ポット H.22.5 砂糖入 H.15.0 ミルク入 H.15.0 トレー D.47.8	スリ・ランカ民主社会主義共和国
25 銀製象置物	1 個	貴石		H.24.7	スリ・ランカ民主社会主義共和国
26 銀製壁掛	1 枚			D.25.0	ネパール王国
27 鍍金獅子置物	1 対	貴石		H.31.0 台 H.6.0	ネパール王国
28 銀製香水入	1 個			H.18.0	バングラデシュ人民共和国
29 銀製茶器	1 組			紅茶入 H.16.0 砂糖入 H.11.5 ミルク入 H.8.6	ミャンマー連邦
30 金銀製煙草箱	1 個			H.11.0	タイ王国
31 銀製蓋物容器	1 個			H.28.5	カンボディア王国
32 銀製宝石箱	1 個			H.7.8	マレーシア共和国
33 銀製煙草箱	1 個			H.6.2	マレーシア共和国
34 金装短刀	1 口	貴石 木 象牙		L.69.0	インドネシア共和国
35 銀製茶器	1 組			大ポット 19.6 小ポット H.15.6 トレー D.47.3	インドネシア共和国

List of Exhibits

America

1.
Silver “Apple”
H.11.0
United States of America
2.
Gold “Chrysanthemum”
H.12.0
Republic of Venezuela
3.
Silver Tea Set
Tea vessel H.15.7, Pipe H.23.9
Republic of Chile

Europe

4.
Silver Decorated Tray
H.2.7, D.39.0
Republic of Finland
5.
Silver Wine Vessel
With jewels, 17th century
H.38.5
Federal Republic of Germany
6.
Silver Tea Set
With ivory
Pot H. 18.5, Sugar bowl H.12.0, Milk
pitcher H.7.0, Tray L.49.0
Austria
7.
Gilt Candlestick
With jewels
H.28.5
Kingdom of Belgium
8.
Silver Sugar Bowl
18th century, H.13.7
Ireland

9.
Silver Small Box
H.10.5
United Kingdom
10.
Silver Decorated Tray
D.16.9
United Kingdom
11.
Gilt “Fish” (Articulated)
With jewels
Large fish L.20.0
Spain
- Africa
12.
Gold and Silver Fruit Bowl
H.24.5
The Federal Democratic Republic of Ethiopia

13.
Gold and Silver Sword
Decorated with Openwork
L.101.3
Kingdom of Morocco
With wood
14.
Silver Syrup Cup
19th century
Dish D. 13.7, Cup H.13.0
Arab Republic of Egypt

Asia

15.
Silver Decorated Sword
L.97.5
Hashemite Kingdom of Jordan
16.
Silver Water Pitcher and Cup
Water pitcher H.34.5, Cup H.8.4
Kingdom of Saudi Arabia
17.
Gold Decorated Sword
With jewels
L.97.7
Kingdom of Saudi Arabia

18.
Silver Vase and Tobacco Box
Vase H. 23.5, Tobacco box H.6.0
Syrian Arab Republic
19.
Gold Decorated Short Sword
L.27.3
United Arab Emirates
20.
Gold Decorated Sword
With jewels
L.102.7
United Arab Emirates
21.
Gold Decorated Sword
With jewels
L.101.8
State of Qatar
22.
Silver Tea Set
Water pitcher H.22.5, Cup H.5.3,
Tray D.25.5
Islamic Republic of Pakistan
23.
Silver Tea Set
Pot H.22.5, Sugar bowl H.13.5, Milk
pitcher H.12.0
Islamic Republic of Pakistan
24.
Silver Tea Set
Pot H.20.5, Sugar bowl H.15.0, Milk
pitcher H.15.0, Tray W.47.8
The Democratic Socialist Republic of
Sri Lanka
25.
Silver Elephant
With jewels
H.24.7
The Democratic Socialist Republic of
Sri Lanka
26.
Silver Wall Decoration
D.25.0
Kingdom of Nepal

27.
Gilt Lions
With jewels
H.31.0, Stand H.6.0
Kingdom of Nepal
28.
Silver Perfume Vessel
H.18.0
People’s Republic of Bangla Desh
29.
Silver Tea Set
Tea vessel H.16.0, Sugar bowl H.11.5,
Milk pitcher H.8.6
Union of Myanmar
30.
Gold and Silver Tobacco Box
H.11.0
Kingdom of Thailand
31.
Silver Lidded Vessel
H.28.5
Kingdom of Cambodia
32.
Silver Jewel Box
H.7.8
Malaysia
33.
Silver Tobacco Box
H.6.2
Malaysia
34.
Gold Decorated Short Sword
With jewels, wood, and ivory
L.69.0
Republic of Indonesia
35.
Silver Tea Set
Large pot H.19.6, Small pot H.15.6,
Tray D.47.3
Republic of Indonesia

海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き

三の丸尚蔵館展覧会図録No. 10

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成8年1月6日発行

© 1996, Museum of the Imperial Collections

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

海を渡ってきた贈り物—金銀の輝き

三の丸尚蔵館展覧会図録No.10

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成8年1月6日発行